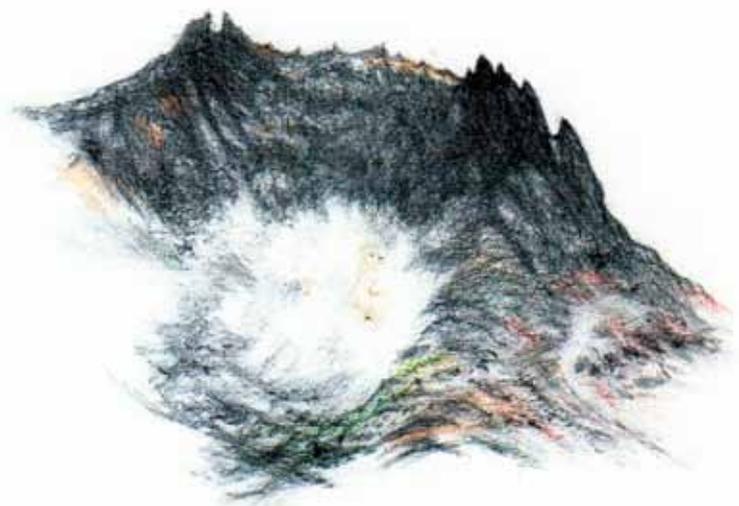


あそ 3
2021



山巡り 須賀忠男



那須 茶臼岳 1915m

未だ噴煙を上げているお釜

旧噴火口の縁に祠のある山頂がある

信仰登山の山

下山後の温泉がお楽しみ♪

あそ

三月集

窗

佐藤 喜孝

春の月窗を開けるといふてゐる

春いろに溶けのこりたる二十日月

ちゅーりっぷ何につけてもじゃんけんぽん

蝶採のあかごがすっぽり入る網

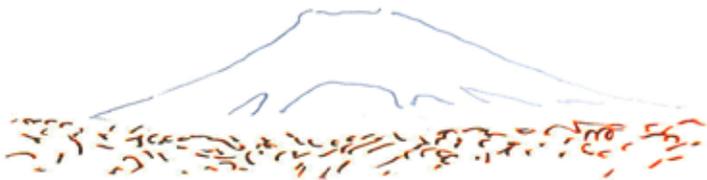
大路の谷には歸り路ばかり

蟬の殻詰めし袋のおもさかな

冷蔵庫の見えるところに置く薬

種なしの柿にも種のありどころ

だう聴くも街の鶉哀しげに



坂の街

篠田 大佳

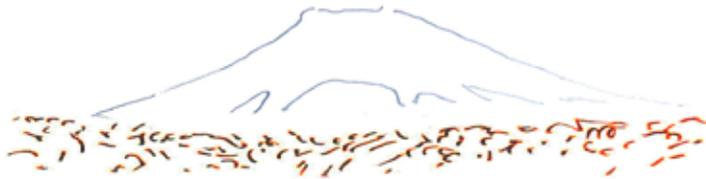
受験子は急坂を避け正門へ
心音のうるさき大学通り春
三宅坂だらだらのぼり桜かな
退職の日のふるさとの桜かな
墓地前のバス停に待ち桜まじ



侘助

須賀 敏子

房州の波の白さや野水仙
侘助やこの武蔵野に住み古りし
着ぶくれて歩幅小さくなりにけり
風花や一人キャンプの背のあたり
日が登る霧氷ホロホロ落下せり
根菜を求む寒晴道の駅
日脚伸ぶプールの窓にさう思ふ
夜更しの共に生姜湯用意して



コロナのお正月

田中 藤穂

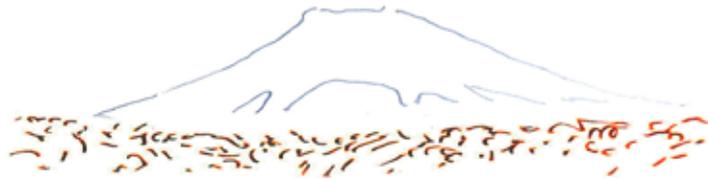
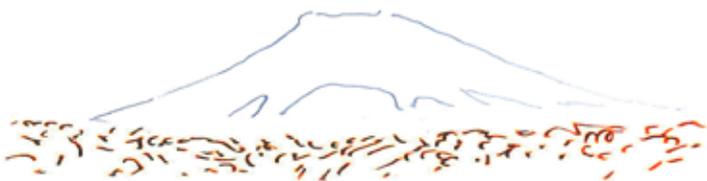
お元日外出すなと云ふお触れ
お元日鳩も雀も水を飲む
青年に俳句手ほどきお正月
青年にゲーム教はる二日かな
手作りの鯛焼きみやげ松過ぎて



初場所

長崎 桂子

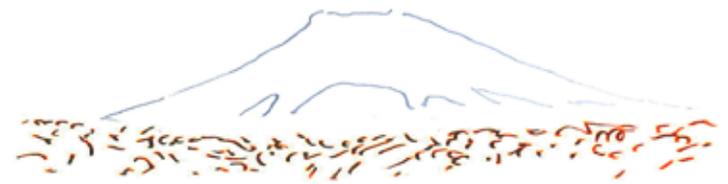
水盤にやっと生け終へ年の夜
初明り門より庭へ届きけり
穏やかな朝日に映える実千両
常常を五分で過ごして去年今年
上品に味の盛付け蕪蒸し
炬燵してほつれの補修ラジオかな
初場所やコロナの故に寥として
誕生日の祝ひ頂戴す寒の内



狐火

森 なほ子

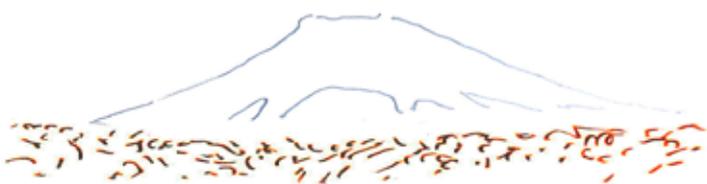
木の影を動く鳥影霜の朝
河光り富士見ゆる日や初氷
白鳥の道直線に曲線に
潜くとき勢ひつけてかいつぶり
白鳥の声で鳴きだす電子辞書
夜咄にもう狐火の出る頃か
村々に電灯ついて狐火消ゆ



緊急事態宣言

赤座 典子

初テレビ七分毎の名人寄席
映像に曾遊の街福寿草
子の電話近況報告寒見舞
節分や「コロナは外」と動画の子
策無くて減り張りの無き冬終はる



令和三年正月

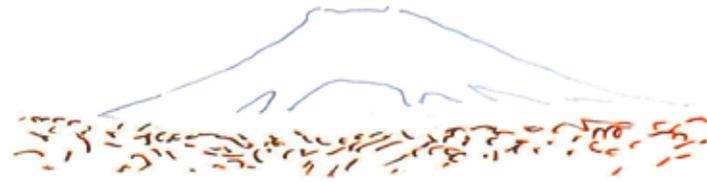
秋川 泉

修正会や大般若経声響く
梵鐘の音響きたる御元日
初詣すれちがふ人皆無口
カレンダーはパリの風景年新た
正月は父の命日雨の朝
明の星ドアのむかふにミャーの声
にらみ合ふ猫水仙の香りけり
起伏ある枯野をひとりツーリング

年の数

大日向幸江

春を待つ人やいつものひとり言
迷ひなく鬼打ち豆を年の数
不忍池ひび割れ目立つ流水期
西病棟遥か彼方に雪の富士
真白な歯を見せ怒る鬼の面
眼鏡拭く三寒四温手のふるへ
春一番雄ライオンの猫なで声
如月の日付の合はぬカレンダー



感染症の時代

七郎衛門吉保

不条理の跋扈再びやコロナ寒

「…警戒」のチラシ降るごと牡丹雪

「…宣言」の澱んで止まる空っ風

「閉店」の悔しげな文字春の砂

雉鳴くや暖簾をおろす古料亭

ゆれる紙閉店通知春荒れる

店仕舞荒東風反す玻璃引戸

赤べこに安寧願ふ春障子

お年玉

篠田純子

縁起ものとして七十路の吾へお年玉

初すずめ七羽来たりて初喧嘩

社長より貰ふ年玉千円ぞ

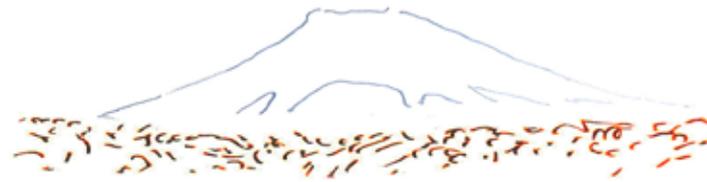
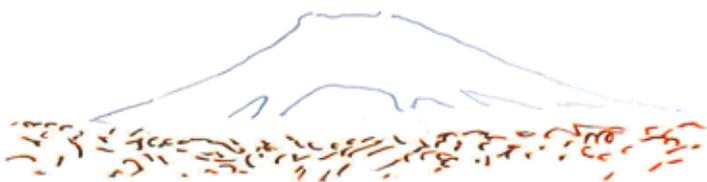
腰へ晒一反冬季鬱病癒ゆ

餅花や人差し指と親指跡

氷柱落つまへとあとなる静けさよ

天赦日に産土神へ初詣

寒風裡銀座にめをとのホームレス



焔収集

つかの間の雪やどりかも寝正月	佐藤 喜孝
エンタシスの柱しぐるる丸の内	篠田 純子
白いコートの彼女は傘もささずに歩いてた	篠田 大佳
下野は父の故郷 那須 須賀	須賀 敏子
シャツを干し隅の枯草抜きすてる	田中 藤穂
大輪に冬薔薇の咲きコロナ増ゆ	田中 藤穂
浮き沈む柚子湯に遊び長引きて	長崎 桂子
夕月の淡く色づく冬木の芽	森 なほ子
新築の窓みな灯り聖夜更く	森 なほ子
「イマジン」よ割れし目鏡よ開戦日	赤座 典子
床の間に蠟梅やをら羽搏ける	赤座 典子
ふたご座を飛び出す光冴えわたる	秋川 泉



親知らぬ兄妹猫や日向ぼこ	大日向幸江
ジャムつくり一つ残して冬至の湯	七郎衛門吉保
窓の外カナリア色の暖かさ	大日向幸江
寒気団来る予想図や大噓 大日向幸江	大日向幸江
羽生の舞辻井の「月光」室の花	赤座 典子
天狼や桃田賢斗の泣きぼくろ	篠田 大佳
じき五年これから五年日記買ふ	須賀 敏子
冬日和ヘルパーさんは自転車で	田中 藤穂
思ひ出す「宮重大根」祖母の味	長崎 桂子
山茶花や妹は紅姉は白	森 なほ子
バンクシーのとどろき渡る噓かな	秋川 泉
等身の動くガンダム冬ぬくし	七郎衛門吉保



人の日や直立猿人に如かず

佐藤喜孝

人日と人の姿とを連想した感慨と読みます。人間と猿人の違いによる美点・欠点は掲句には描かれませんが、その余白を探したくなります。(大佳)

初み空 鴉と妻は顔なじみ

佐藤喜孝

恭子さんは、よく鴉の句を作られたと記憶しています。鳴き声がいろいろあるとも言われ、鴉のその時々鳴き様に、ご自分の気持ちを重ね合わせておられたのでしょうか。鴉を見上げ、「おめでとう」と御慶を交わし合う光景が見えます。(純子)

妻の肺メスが入るも冬董

七郎衛門吉保

パートナーの手術を待つ気持ちを冬董に託しています。不安でいっぱいの中に、一筋の光が作者には見えたのでしょうか。(大佳)

脳内に未開の奥地日向ぼこ

篠田純子

脳を開拓しようと日々生活する作者。日向ぼこに少しずつ現れてくる成果が見えてきます。(大佳)

人の体のことで新情報が次々知らされる。識るごとに知らないことが出てくる。人の部位のそれぞれの働きを分かればわかるほど、恐ろしくなるくらい精緻な構造になってゐる。その不思議を抱へて人は泣き笑ひしてゐる。脳の働きも解明が進み、人工物を脳に埋め込んで人をコントロールできる時代にもうすぐなる。この句から老人が日向ぼこをしてゐる景が浮かぶ。科学の力でアルツハイマーや認知症を防げる時代が来るのだろうか。(喜孝)

配達員表情のなく初御空

篠田大佳

淡々と仕事をこなす人と、正月気分の作者との気持ちのギャップ。短い時間だが作者に後ろめたさを感じさせた。(純子)

新年を迎へた街は人通りも少なく閑かだ。しかし元日から働いてゐる人もたくさんゐる。「配達員」は郵便・宅配・寿司屋と多種。大半の人が家で過ごししてゐる間も街を駆ける。休む側と働く側。大佳君は「表情のなく」と気遣つてゐる。「アリとキリギリス」のイソップ童話が浮かんだ。(喜孝)

ささやかな旅の始まり石路の花

須賀敏子

「さぎやかな」と作者は述べますが、旅の不安に石路の花から励ましを得て、一步一步を踏みしめる歩調を読みます。(大佳)

追ひつけぬ息子の歩調冬の坂

田中藤穂

「息子」というものは、いつだって自分のことに夢中なものです。作者と息子さんとのつかず離れずな距離感が見えます。(大佳)

エンジン音の木霊晩秋の湖

長崎桂子

秋の湖の工事でしょうか、エンジンのけたたましい音の残響が聞こえます。広い景色の中の無機質なものから情緒を汲み取る作者の姿勢と湖の景に度量の大きさを見ます。(大佳)

馬追は精密機械かもしれぬ

森なほ子

たしかに、馬追虫の姿や鳴き声を調べると、ロボットのようでした。生物と機械というものは、親和しているようにも思います。「バイオミメティクス」という動物の身体の構造に学ぶ技術があるそうで、トンボの目の構造からレンズ技術が発展したり、ハチドリホバリングからドローン技術が生まれたりしているそうです。(大佳)

バッタの一種である馬追は腹部を除いて固い殻で被はれてゐる。まるで金属のやうに固い。眼だつてさうだ。哺乳類は眼が弱点。危険になると瞼を閉じる。ところがカマキリなど斧で目をこしこしと掃除してゐる。馬追の脚の関節など人型ロボットのやうだ。男の子は半分機械と思つて甲虫などおもちゃにしてゐるのかもしれない。女性でも掲句のやうに虫を見るのかと意外に思った。(喜孝)

冬薔薇退院祝ふ淡き色

赤座典子

退院時に贈られた冬薔薇の淡さに、華やかでありながら見る人を刺激しない細やかな気配りが見えます。(大佳)

臍を出し転げ遊ぶ子秋日和

秋川 泉

家の中で元気に遊びまわっている子どもが見えてきます。家庭に笑い声が絶えないことでしょう。(大佳)





佐藤喜孝

篠田大佳

令和三年政府公認寝正月
初富士や大きひかうき見える島
獅子像に三越印のマスクかな

◎令和二年四月七日に東京などに「緊急事態宣言」が出た。令和三年一月七日に再度東京に「緊急事態宣言」が出た。七種中、政府は緊急事態宣言を出さうか協議してゐた。「政府公認寝正月」とはよく言ったものだ。家に居ると云はれると外出したくなる。人間は厄介な動物である。前にも書いたが今の異常なコロナ被害を後の世に振り返った時、あまたのコロナ騒動の下で詠まれた庶民感覚は大切な資産になるかもしれない。『俳句通信』120号に「コロナ禍の俳句について」といふ特集に様々な意見が述べられてゐた。

○「大きひかうき」が見える島は何処にあるのだらう。その島から富士が見えるらしい。もしかし

たら富士山が聳えるところの島かもしれない。「大き」といひ「飛行機」とは書かず「ひかうき」と薄気味悪い。何か言ひたいことがあるらしいのだ。その魅力は十分あるのだが、私には結像できなかつた。

○三越の特製マスク。あの獅子の像と三越のマークがみえる。何かコロナを確りと防いでくれさうなマスクだ。ここの「かな」はだうだらうか。

須賀敏子

世界史の年表に載る去年今年
乗り越えるためにある危機水仙花
探梅やコロナ自粛の日々なれど

○解ると云へば解る句。解らぬと云へば解らぬ句。俳句は省略といふが、そこが難しいところ。自作を第三者の目で見る時間も必要と思ふ。例へば「世界史に残るコロナに去年今年」と分かりやすく書くのもある。

◎力強い句。社会でも個人でも様々な危機に見舞はれる。危機は乗り越えるためにあるとはなんと前向きな姿勢である。寒中に咲く「水仙花」の凛々しさが効いてゐる。

○まさにその通り。私も今年は静かに近場ではあるが、あの桜この桜と尋ねるつもりが、思ひ出と

重なり行くのをやめるかもしれない。迷ってゐる内に桜は去つてしまふかも。

田中藤穂

コロナ増ゆるニュースに明けしお元日
庭に剪りし水仙匂ふ一人の居
遅れつく賀状や友も高齢に

○今月もコロナの句が多い。コロナに振り回されてゐる。コロナはコロナとして俳句生活は一步引いて見るのも一法か。それにしてもなかなか下火にならない。

○花屋の水仙と違ひ慈しんできたわが庭の水仙。殊更の句である。さう云へば水仙の匂、いや花の匂ひなどんと縁のない生活になった。先日散歩してゐたら公園の隅に太神樂が咲いてゐた。手入れがされず藪の椿のやう。一蕾頂いてきたが匂が付かぬうち咲いて散つてしまった。

○年末の慌ただしさを避け年が明けてゆつくり認めた賀状である。友もそして作者も高齢に甘んじマイペース。わたしもマイペースこそ健康の秘訣と実践してゐる。

長崎桂子

ゆるゆると英気養ふお正月
初売の半纏は市松模様
健康診査わるし寒のゆううつ

◎「英気」は俗にいふ「やる気」。この英気・やる気を養ふのに「ゆるゆると」はおもしろい。桂子さんはお正月を迎へるのでお疲れになられたのか。「ゆるゆると」はこれまたマイペース。

○「初売の半纏市松模様なり」と語調を調べると、元句のぶつきらぼう感がなくなる。今話題になつてゐるアニメの『鬼滅の刃』の主人公が着てゐる青と黒の市松模様の半纏を想起した。半纏でなく羽織と書いてあるところもあった。新しいものへのアンテナをしっかりと磨かれてゐるやうだ。

○「ゆううつ」であるからに「わるし」は云はなくとも。わたしも再検査で大きな病院で再検査するやう紹介状を頂いた。桂子さんの掌は大きくがっちりしてゐる働く手だ。頼もしく思った。「ゆるゆると」やっつけていませう。

森なほ子

初氷ながらきらりと日を返す
氷柱下げ木の看板の会社あり

つまらなし糖度保障といふ蜜柑

○「ながら」の使い方が面白い。初氷は本来「きらりと日を返す」やうな張り方ではないはずなのに、なぜかこの初氷は、となほ子さんは驚いてゐる。なほ子さんの初氷は、薄くて日が登るとすぐ溶け出すイメージなのかもしれない。

○東京から離れた寒い地方で見かけた会社の看板に興味を持たれた。立派な板に墨痕鮮やかに書かれたであらう看板の字もいまは薄れてしまった。年季の這入った三合社の風情が垣間見える。

○甘い蜜柑に当たると嬉しくなる。しかし人間は何処か偏屈にできてゐるらしい。初めから甘さを保証されてゐる蜜柑にどこかつまらないなど思つてしまふ。酸っぱいより甘いのがうれしいのだが。当たりはずれの昔の蜜柑も懐かしいと思つてしまふ。

赤座典子

日常か非日常かと去年今年

鈴生りの鬼柚子の綾瞬きぬ

下校時の列の散りける四温かな

◎本当にこの頃の生活リズムを思ふと現なのか夢なのかと思つてしまふ。「日常・非日常」がここでは効いてゐる。生きてゐる。コロナで掻き回された、乱された生活を一步退いてかう詠む。物事を

をしつかり見てゐる目を感じた。

○見たものでなければ分からぬ光景。「綾瞬きぬ」は作者特有の感性。句会でこの句に出会ったらすぐお尋ねしたことだらう。

○春先の下校児の解放感が詠まれてゐる。作者には

猫柳子等さざめきて下校せり

と、これも春の句。『あを』には「下校」で佳句が揃つてゐる。

下校時のばらばら走る昼の火事 竹内 弘子

下校の児ひそひそ話す曼珠沙華 長崎 桂子

熟麦の中を下校の子の頭 田中 藤穂

秋川 泉

ストーブの灯油つきさう針仕事

郵便に洋菓子を入れ寒見舞

凍晴や昔の記憶甦り

○煖房のエネルギー源も本当に様々。日光やおしくら饅頭にはじまり誠に種類が書ききれぬほどある。灯油もお世話になった。今は夕方になると音楽を流しながら自動車で売りに来る。雪国と違ひ関東地方では灯油が無くなると詰め替えねばならぬ。灯油を入れ替えるのは面倒。灯油が尽きる前に針仕事で済むかちょっと心配。母の姿と重ねて、秋の夜寒に針の手止めてヨ／＼主の安否を／＼思い出す、といふ民謡を思ひ出した。「ストーブの油尽きさう針仕事」では。

○少し前まで「小包」といふ言葉があった。最近それが無くなったことを知った。(遅い!!)「郵便」の言葉の範囲が広すぎる。さうかといって「ゆうパック」では味気ない。今は消えたかも知れぬが「小包」でよいと思ふが。

○同感。温暖化とは云へどもキンとした寒さに出遭ふと句のやうな憶ひになる。総じて「昔の記憶」なのだが、その記憶の具体例を述べたら句がどうなるか興味が湧いた。

大日向幸江

携帯に食べ方を見る土筆んぼう
三月や出しておく物仕舞ふもの
梅桜花見予報の慌ただし

○一流の料理人が書いた料理本をよく妻が開いてゐた。いまは「ブックパッド」や「クラシル」「ユー・チューブ」と選り取り見取りで料理を教へてくれる。摘草で摘んで来たはよいが今までと違ふ食べ方はないかしらと携帯を覗く。時代に遅れぬ幸江さんである。元句「土筆んぼう」は旧かなで「土筆んぼう」。嫌ふなら「土筆んぼう」または「つくしんぼう」。あめんぼうも「あめんぼう」と表記する。○季節の移り変りごとに衣類の出し入れだけでも主婦は大仕事。仕舞ふと言つてもただ仕舞ふといふわけにもいかぬ。そこへ行くと独り者の私は、私さえよければいい加減で済みます。一例をあげれば扇風機は一年中部屋に鎮座してゐる。幸江さんが見たら開いた口が塞がらないことだらう。○古来日本の詩歌は梅の花や桜の花を愛でてきた。その梅や桜の見ごろをニュースとして伝える。他国ではこの様なことはあるのだらうか。もしかしたら日本特有のニュース感覚かも知れない。俳諧らしいと云へばそれまでだが、やはり詩歌は花そのものを愛でたいものだ。

七郎衛門吉保

伏せ置くや白磁茶碗の寒浅間山
餌台の鳥のちらちら梅見かな
LINE来る孫の動画の寒玉子

○雪に覆はれた浅間山を伏せた白磁の茶碗に見立てた。「如く俳句」・「見たて俳句」は俳句の一つの表現方法である。『俳諧大辞典』の「見たて」に

【あるものを他のものになぞらえる作り方。『毛吹集』に「可宜句躰之品々」の一つとして「見たて」をあげ、川岸の洞は螢の瓦灯かな」「波たてば輪違なれや水の月」「ふりまじる雪に霰やさねき綿」等の例句がある。貞門の初期の発句の大部分は見立ての句である。】

それに加え『俳文学大辞典』には【『万葉集』の寄物陳思・譬喩歌、中世の戯曲・異類物語・御伽草子などを経て、近世の誹諧で洗練され、戯作・狂歌・版画に及び、日本文学に太い系譜を引く。】と。私の好きな見たての句に

はるもやや雞の蹴爪や牡丹の芽 磊石

柴田宵曲がこの句に【単に「牡丹の芽は雞の蹴爪の如し」といったのでは、そういう思いつきを述べたまでのものであるが、漸くに春がととのい来るといふ背景の下にこれを置くと、見立以外に或感じを伴って来る。「雞の蹴爪」も漫然たる思いつきでなしに、春の感じを助けていることがわかる。】と。おほいに首肯した。（圈点筆者）

○梅の花に目白など尋ねてくると嬉しい。さかしまになって花をのぞき込む姿など息詰めて見入る。掲句は鳥の中には花より団子の方を取るヤツがあると。吉保さんはさう詠んではぬないがさう読んでも俳諧の解にさう外れてはぬないはず。

○「LINE来る」と名詞に直付けで動詞がくると違和感をおぼえる。「LINEで来る」と六音

あをの「インサート」

宅録

篠田大佳

音楽は基本的にデータ化しています。データを整理していると、忘れていた曲が出てくることがあります。その中に自作の録音が出てきて、聴いてみたのですが、若書きのごとく、照れくささと懐かしさを覚えました。

定期的にアルバムと称して体裁を作っていたのですが、ふと思いつき、溜まっていたアイデアのそれぞれにタイトルをつけ、選曲をしてアルバムの体裁を作ったというのが年始のことです。

チゴイネルワイゼン

田中藤穂

八歳上の姉が学校を出て就職、初めての給料で蓄音機を買いました。そして最初に買ったレコードが「チゴイネルワイゼン」。何度も繰り返しかけていたので私も覚えてしまいました。サラサテ作曲のバイオリン曲です。今でもその曲を聴くと、まだ若かったあの頃の姉や二人の兄や弟の姿など思い出します。その後戦争の時代になって外国の音楽など家の外へ洩れるような音でかけられなくなります。思えばいろんな時代を通過してきました。あの蓄音機のその後の行方は不明です。蓄音機はレコードプレイヤーのことです。

城ヶ島の雨

長崎桂子

高校二年生の暮れに父が同業者と、年が明けたら慰安旅行に出かける。そこで余興の歌の練習にレコードを買に行くから一緒にいこう。欲しいのを買ってあげる」というので出掛けて、北原白秋作詞の藤原義江歌手の『城ヶ島の雨』を買ってもらった。

それからは家に居れば練習をしているので始終騒がしくて「煩い」と散々家族や来客に嫌がられました。高校卒業の折は音楽の採点に良い点をいただき、とつても嬉しかったことを思い出します。

トルコ行進曲

秋川 泉

それは『トルコ行進曲』であった。家には蓄音機もレコードもなかったが、父が私のためにレコードを買ってきてくれた。なぜか私の記憶にはそれが生涯で初めて聴いた音楽であった。本当に嬉しく、光溢れる縁側で母と父と三人で聴いた。緑の美しい季節であった。

野崎参り 大日向幸江

私の思い出の曲は『野崎参り』だったと思う。母が私に舞踊教室に行かせたく絵日傘を持って踊るこの曲が記憶の中での初めての曲だった。

後は童謡。その中にある『雨降りお月さん』の詩の物哀しさが子供心に染みしました。

小姓縛り首になつちまえ

吉津睦子

昨年、日本の音楽会に關しては、キャンセル続出となりました。コロナ故に昨年暮私は久方ぶりに王子ホールへ出かけました。初日は、ジョン健ヌッツォがクリスマスソングを。二日目は今井俊輔によるアリア、『ファルスタッフ』から、小姓縛り首になつちまえ」という面白いアリアでした。最終日は宮本益光の故里の歌、ヴェルディの『ロヴァンスの海と陸』。聴き応えがありました。小さなりサイタルでしたが、心に残るひとときとなりました。

イマジン

篠田純子

ジョンレノンの追悼番組を、テレビで観た。レノンは俳句に興味をもち、イマジンは俳句を意識した、語彙を省略した作詞とのこと。反戦平和の思いのこもる曲は、9・11の慰霊に集まった人々の心に響いた。

今年は、三味線でイマジンを弾いてみようかと思っている。



文

裏抜けの恋文とどく五月かな
返し文口説くなりたる春の雨
親し友行書の文にあやめの絵
荅かな遺書とも思ふ母の文
夏蝶や追悼の文書きあぐむ
時雨るるや竜飛崎から懸想文
顔知らぬ人へ書く文春の雪
細水や心を溶かす文届く
覺悟めく文へ返信冬の雨
文をかくはじまりは雨みなづきの
香水のただよふ文をもらひけり
春庚子閏年なる懸想文
敗戦日兵隊さんの父の文

踏石

踏石のうごきだす庭猫の恋
踏石に靴と草履と竜の玉

踏切

踏切の紫露草の揺れる
踏切の音の澄んでをり朝寒し
踏切の鳴るも気怠き夏来る
いつの世も踏切に居る夏帽子
地吹雪が踏切を押しわたりけり

佐藤 恭子
佐藤 恭子
長崎 桂子
佐藤 恭子
田中 藤穂
田中 藤穂
佐藤 恭子
田中 藤穂
齊藤 裕子
田中 藤穂
秋川 泉
秋川 泉
秋川 泉
赤座 典子
赤座 典子
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
赤座 典子
赤座 典子
定梶 よう

踏切の音楽鳴れり枇杷熟る
土手道の小さき踏切曼珠沙華
踏切のひねもす開き梅の花
踏切のカンカンカンと柿熟す
踏切や冬の満月はなさきに
踏切は神社のはじめ青葉風
待たされてゐたり踏切春日傘

踏台

神棚に餅花踏台が無い
踏台やサマータイムといふありき

麓

目覚めれば青嶺の麓麓寝台車
麓より削れり夏のモンブラン

堀

青梅雨や萩の城下の築地堀
青梅を掌にあまるほど堀の外
七変化猫が伸びする堀の上
横丁の古板堀の鳳仙花
白菜のたがひちがひや堀の上
掘割も堀もかたぶき猫の恋
黒堀に沿ひて結梗の箱育ち
堀舐める探照灯の冴え返る
沈丁花ブロッケン堀のあちら側

田中 藤穂
早崎 泰江
鈴木多枝子
須賀 敏子
定梶 よう
篠田 純子
定梶 よう
篠田 純子
須賀 敏子
井上 石動
須賀 敏子
芝 尚子
芝 尚子
鈴木多枝子
赤座 典子
竹内 弘子
後藤 志づ
篠田 純子
須賀 敏子

日脚伸ぶ禁裏の長き土堀かな
鳳仙花質屋の堀の高き事
長き堀来てふりむけば長き堀
きさらぎや忍び返し堀つづく
青蔦の千切り捨てあり堀の外
片陰は堀よりも濃く存在す
堀越えて木槿むらさき新仏
板堀の陽の温もりし石路の花
さはやかやゆるりとたわむ築地堀
五月雨や堀這ふ草木青ふかし
春果てぬ猫のひつかくトタンの堀
この堀に確か絡みし時計草
秋めくや堀の真下に猫落ちる
ブロッケン堀俯きがちの日傘かな
苦瓜や隣り堀で元氣なり
神楽坂黒板堀も冬に入る
板堀を猫の擦りゆく十三夜
板堀に他人の布團の花模様
板堀を越え白梅の枝垂をり
ブロッケン堀一齣欠けて雪柳
外科の堀白さるすべり咲きつげる
カサブランカ二輪車首出す堀の外
空蟬の縫りつきをりブロッケン堀

芝 尚子
芝 尚子
定梶 よう
鈴木多枝子
田中 藤穂
佐藤 喜孝
渡邊 友七
須賀 敏子
篠田 純子
長崎 桂子
定梶 よう
森山のりこ
竹内 弘子
篠田 純子
須賀 敏子
田中 藤穂
竹内 弘子
佐藤 喜孝
須賀 敏子
須賀 敏子
竹内 弘子
早崎 泰江
山莊 慶子

掘割も堀もかたぶき猫の恋
去年の月境の堀を猫あるく
枝垂梅黒板堀の華やぎて
花の雨笹のもれ出づ竹の堀
朝毎にブロッケン堀の蟬の殻
屋敷街堀の内なる柿の赤
冬芽濃き蔓の勢ひ堀を越ゆ
青蔦を褒めてゐる声堀の外
加賀町の堀より高く芽吹く木々

兵

赤のまま上等兵の墓のそば
佐助の白海自の出兵す
春の雪節骨兵器となりたる日
菜の花に走りよりも兵器なし
気付かれず古巢に出でつ二等兵
凱旋の兵士のころ梅雨晴間
蝶の屍とタリバンの兵重ねけり
傷兵も見しこの病院の青筑波
街なかに銃兵黄蝶弾みやまず
凧のこの墓上等兵で死にき
兵隊が海に向かうにサクラ咲く
モノクロとセピアと少年兵も梅雨
露けしや二等兵いま苔むして

竹内 弘子
竹内 弘子
須賀 敏子
佐藤 恭子
山莊 慶子
七郎衛門吉保
長崎 桂子
田中 藤穂
佐藤 恭子
栢森 定男
須賀 敏子
佐藤 恭子
早崎 泰江
篠田 大佳
東 亜未
渡邊 友七
堀内 一郎
佐藤 喜孝
定梶 よう
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
鎌倉喜久恵

あとがき

あを作品鑑賞

作品鑑賞は篠田純子・篠田大佳のお二人にお願いしてきた。楽しみにしている。

扉

前年に続き須賀忠男様にお願ひできた。今年は山のシリーズ。一月は「常念」。私が最後に登った？山。燕岳から歩いて上高地に下りた。コマクサなどを近々と見た記憶が甦った。三月は茶臼岳。那須は二回行ったが二回とも山頂に行つておないと記憶してゐる。一回は堀内一郎さんたちと那須の向こうの「煙草屋」泊まった。翌日何処へ行ったか思ひ出せない。もう一回は一人で。霧が深かったので怖くて山頂行はやめた。登山者が誰もいない日だった。

次は何処へ連れて行つてくれるだろう。

あをのコンサート

短文欄に様々な思ひ出が書かれた。

わたしがはじめて買ったレコードはSP盤の『葛西囃子』だと思ふ。なんでこれを買ったのか数日考へたが全く意

味不明。しかしメロディは覚えてゐる。youtubeで調べたら懐かしいリズムい出合へた。ついでにラジオで聴いても一度聴きたい思つてゐたセロニアス・スムックの『荒城の月』を探してみた。ありました。youtube様さま。耳鳴がうるさくCDを聴かなくなつた。代わりにテレビでクラシックを聴いてゐる。奏者の表情など視覚に意識が行き耳鳴が気にならない。いまテレビに映し出される音楽家は知らない人ばかり。でも素人判断だが若い頃聴いた人より技術は進んでゐるやうにきこえる。

(喜孝)

二〇二一年三月号

発行日 三月二十二日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)